

28 筋ジストロフィー症児の就学前教育

国立療養所松江病院

黒田 憲 二 飯塚 治 枝
森山 紀 子 荒川 陽 子
鳥谷 初 代

〔目 的〕

家庭の事情や希望入所を含め5名の幼児が入所しているが、知的能力や運動機能の差異とホスピタル的要素が絡み合い色々な面での発達障害を生起せしめている。そこでこの5名の中より集団教育として扱ひ得る3名を抽出してグループ形成をし、グループ指導する中で自立心を培い、情緒安定を計り、友達づくりをすることを目的とする。

〔方 法〕

対象児はWH型の幼児3名（M子S・46・2・9生、L子S47・4・1生、S子S46・8・6生）で指導期間は昭和51年4月より52年3月までの一年間とする。3名のグループの構成にあたり知能検査（精薄児判別のための検査—金子書房）と観察の結果を参考にし、集団指導が可能であることを確認する。

具体的な指導方法としては期間を一期から三期に分け、各々の期に指導目標を掲げ、毎週一回（AM10:00～11:00）指導員、保母、看護婦が指導にあたる。教材は知能検査の下位検査（分類言語化、絵の説明）を参考にして絵本、紙芝居、テレビ、スライド、自然観察等を使用する。

〔結果 考察〕

一期（4月～7月）においては緊張気味で疲れ易くグループとしてのまとまりも悪い。指導者側の児の把握にも不十分さがあった。

二期（8月～11月）に入ると積極性が見られるようになり3人のまとまりも良くなり、協力協調関係がでてきた。知的欲求も旺盛になり知的発達に著しいものが認められた。（図I表I）

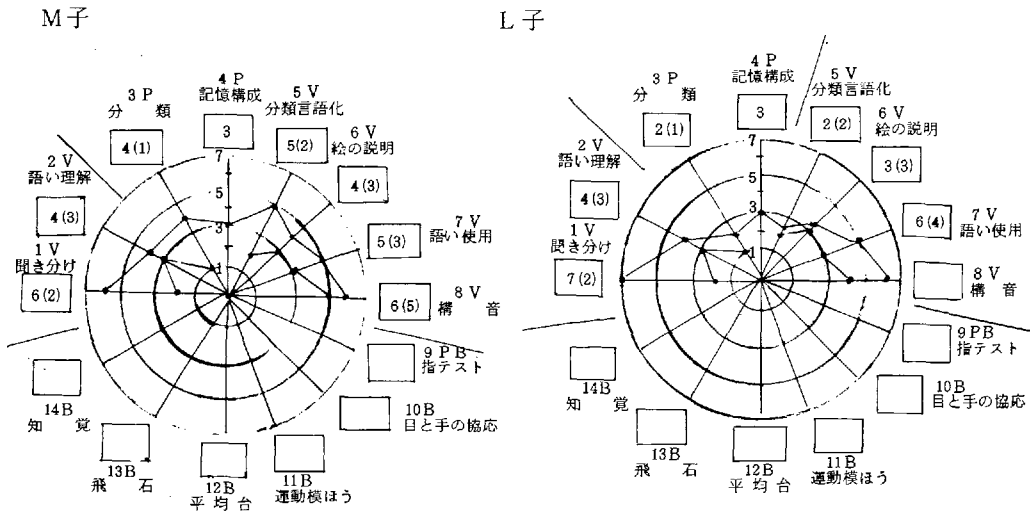
三期では3児と他の幼児との間にも新しい関係が見られ、音楽リズム等では5人で一緒に遊べるようになった。

一年間を振り返ってみるに初期の目的は一応達成されたと思われるが、しかし幼児の段階で家を離れて生活さすことの諸問題の抜本的な解決はできえないが、現実的に考えると現在の体制でも指導者（職員）側が意図のかつ積極的なかわり合いを持つならば幼児の発達の保障もある程度可能であると思われる。対象児がWH型であることでは発達の変化（特に知能検査の結果）を考える時に指導前の療育環境の整備に反省をしなくてはならないと思う。

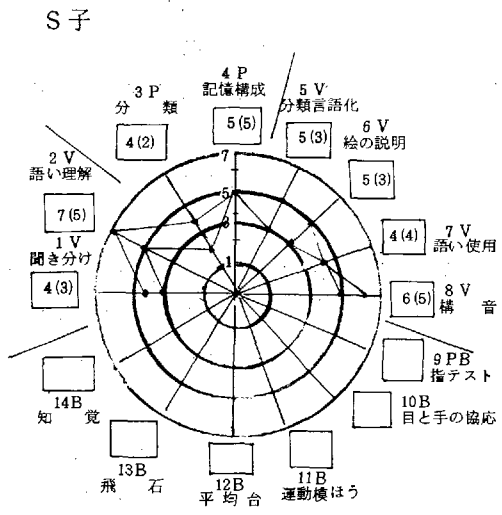
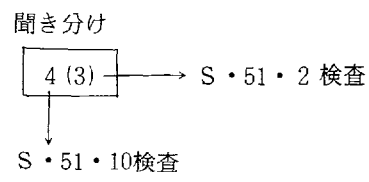
（追 加）

52年度の研究後知能検査の結果に「知能 環境」という側面でM子とS子との間に差が生じたので参考として追加する。(図2表2)

(図 I)



(例)

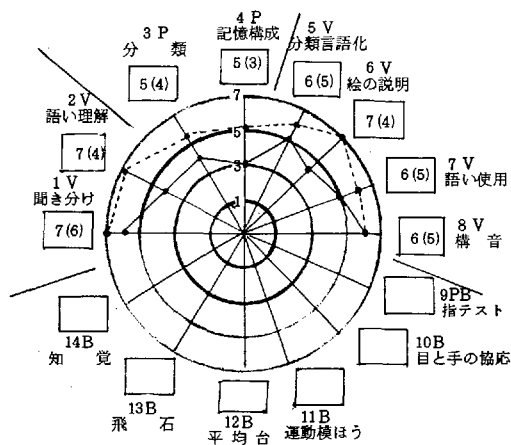


〔V I Q〕表 I

検査日	M子	L子	S子
51・2	68	80	87
51・10	94	104	106

(追加) 図 2

M子



S子

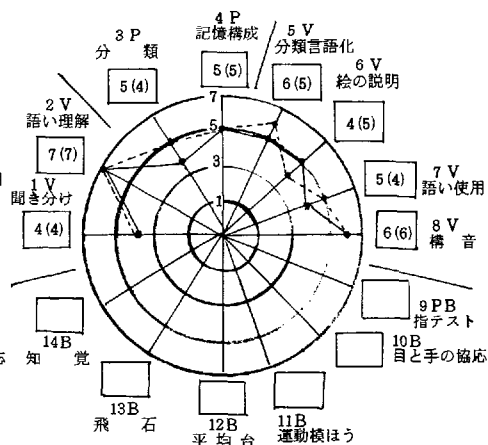


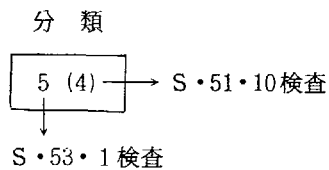
表 2

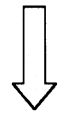
検査日	VIQ	MA	VIQ	MA
51・2	68	3 : 5	87	4 : 1
51・10	94	5 : 4	106	5 : 6
53・1	121	8 : 6	87	5 : 8

※ M子52・3より
小学校入学

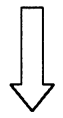
S子
従来どおり病棟

(例)





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

家庭の事情や希望入所を含め5名の幼児が入所しているが、知的能力や運動機能の差異とホスピタル的要素が絡み合い色々な面での発達障害を生起せしめている。そこでこの5名の中より集団教育として扱い得る3名を抽出してグループ形成をし、グループ指導する中で自立心を培い、情緒安定を計り、友達づくりをすることを目的とする。